

## 第341回 昭和大学学士会例会 (アーツ・アンド・サイエンス部会主催)

日 時 平成29年11月18日(土) 10時～12時  
場 所 昭和大学富士吉田校舎5号棟第二講堂  
担 当 昭和大学富士吉田教育部運営委員会

### 1. 東日本大震災へのひとつの視点—文化的 視点から文明論的視点へ (一般)

昭和大学富士吉田教育部  
田中 周一

東日本大震災からすでに六年半が経過した。これまでの日々を振り返ると、震災当初の全国的な「絆」の意識の高まりは過去のものになりつつあるとみなさざるを得ない。こうした日本人の心の推移は、実は現在に始まったものではない。鎌倉時代の名著として知られる『方丈記』、その半分近くのスぺースが各種の自然災害の記述にあてられていることは思いのほか知られていない。京都を襲った元暦大地震の際の人心がどのように変化していったか、ひとことで言えば忘却である。関東大震災の際に内村鑑三が綴った言葉は、帝都を壊滅させた震災をひとつの罰ととらえるとともに、その代償として得たものが良心であったと説く。しかし史実の示すとおり、その後の日本は未曾有の大戦へと歩みを進めていく。

今回の大震災に際しても多くの思考が多種多様なかたちで表明された。「絆」の流布はひとつの流行現象でもあった。この人倫の視点に立つ真情吐露は、これまでの歴史の中で繰り返されたことの再現にほかならない。しかし今回の震災には、従来と異なる側面もみとめられる。原発事故に関わる言説に代表される文明論的な視点の存在である。倉本聰、宮崎駿らの著名人が揃って現代文明のあり方そのものへの省察の機会とすべきものとして震災をとらえている点は特徴的である。震災が提起する未来への展望の必要性は、むしろ忘却の現状にあって再検討され

ねばならない課題であると論者は理解している。

### 2. 医療系教養科目としての薬用植物学 (第2報) (一般)

昭和大学富士吉田教育部  
平井 康昭

漢方製剤に用いられる生薬のほか、医療の現場で用いられる医薬品の半数以上は植物などの天然物に由来している。また、アウトドアライフの人気の高まるにつれ山菜と毒草の誤食による中毒が増加している。このような状況の中、薬用植物の知識は医薬品や誤食による中毒について理解するのに役立つだけでなく、患者とのコミュニケーションツールとしても有用である。昭和大学では医系総合大学である特長を活かし、医学部、歯学部、薬学部、保健医療学部(看護学科、理学療法学科、作業療法学科)の学生を対象とした教養選択科目として、2014年度から薬用植物に関する講義(旧講義名:「医療に活かす植物の知識」、2016年から「薬用植物の科学」)を開講した。講義では食品、健康食品、医薬品など、身のまわりで用いられている植物や有毒植物について事例を示し、わかりやすく解説するとともに、東洋医学との関係についても説明している。

本講義の履修者数は年度によって異なるが、毎年、各学部の10～20%の学生が選択している。また、選択科目であることから講義に対する学生の意識が高く、受講態度も素晴らしい。今回はその概要と今までの履修状況について報告する。

\*医療系教養科目としての薬用植物学(第1報)  
日本生薬学会第62回年会講演要旨集 p182(2015)

### 3. 健診にて偶然発見された小児 1 型糖尿病の 2 症例 2 例 (一般)

<sup>1)</sup> 昭和大学江東豊洲病院小児内科

<sup>2)</sup> 昭和大学医学部小児科学講座

花岡健太郎<sup>1)</sup>, 土橋 一重<sup>1,2)</sup>

森田 孝次<sup>1)</sup>, 三輪 善之<sup>1)</sup>

山崎 明香<sup>1)</sup>, 渡邊 佳孝<sup>1)</sup>

杉下友美子<sup>1)</sup>, 水野 克己<sup>1)</sup>

板橋家頭夫<sup>1,2)</sup>

小児の 1 型糖尿病は年間発症率約 1.5 ~ 2.5/10 万人という非常に稀な疾患であり, 小児慢性特定疾患に指定されている。この 1 型糖尿病は膵ランゲルハンス細胞の $\beta$ 細胞が破壊されることにより, インスリン産生が障害され, インスリンの絶対的な欠乏に陥る疾患であり, 遺伝的・環境的な要因によりインスリンの抵抗性が増大し, 相対的にインスリン欠乏に陥る 2 型糖尿病と区別される。膵 $\beta$ 細胞が破壊される機序としては, 膵ランゲルハンス細胞に特異的な自己免疫反応がおこる自己免疫性 (type1A) と, 自己免疫の関与が明らかではない特発性 (type1B) に分類される。臨床経過からの分類では, 急性発症 1 型糖尿病, ほぼ無症状の状態に診断され, 膵臓 $\beta$ 細胞破壊がゆっくり進行する緩徐進行 1 型糖尿病のほか, 糖尿病性ケトアシドーシスを伴って急激に発症し, 発症時点でインスリンの分泌が枯渇している劇症 1 型糖尿病もみられる。今回, 臨床症状は伴わないが, 健診での尿検査, 血糖測定を契機に糖尿病が疑われ, 当院での精査の結果, 自己免疫性の 1 型糖尿病の診断に至った小児糖尿病患者 2 例を経験した。いずれもインスリン自己注射を導入し, 在宅でのインスリン自己注射管理を行いながら, 外来にて良好な経過をたどっており, 報告する。

### 4. 大学生のセクシュアル・マイノリティに対する態度・意識の規定要因 (一般)

<sup>1)</sup> 昭和大学富士吉田教育部

<sup>2)</sup> 昭和大学富士吉田教育部学事部・カウンセラー

須長 史生<sup>1)</sup>, 小倉 浩<sup>1)</sup>

正木 啓子<sup>2)</sup>

本報告では, 大学生のセクシュアル・マイノリティに対する意識や態度の規定要因を数量的に把握し, その分析を試みる。近年, マスメディアを通じて, セクシュアル・マイノリティに対する関心は高まっているが, それがただちに偏見の解消につながるかどうかは明らかになっていない。本報告では若者の意識や態度の実情やその規定要因を明らかにすることで, 将来的な展望に道筋をつけたい。調査データには 2017 年 10 月に本学一年生に対して実施されたアンケート調査を用いる。アンケートは授業終了後の休み時間に行われ, 回答はインターネットを通じて行われた。回収率は 76.9%であった。

得られた結果 (単純集計) を全国調査と比較すると全体的に本学学生の方がセクシュアル・マイノリティに対して偏見の度合いが低いことがうかがわれる。また, セクシュアル・マイノリティに対する偏見の度合いを被説明変数とし, 性別, 学部, 当事者との接触経験, 当該項目に対する知識量などを規定要因としてその因果関係を調査した項目では, 接触機会や知識量が正の相関を示し, 性別では女性が肯定的という先行研究を概ね支持する結果となった。とりわけ偏見の度合いと知識量との間に強い相関がみられたことは, セクシュアル・マイノリティに対する今後の教育的サポートの意義と重要性を示唆するものとなった。